



今、ボランティアセンター担当者にとって大切なコーディネート力。企業との連携、福祉教育の推進、そして災害ボランティアなど、地域の課題に協働で取り組むため、コーディネートの重要性が高まっています。ボランティアセンター担当者が押さえるべきコーディネートのポイントを連載で紹介します。

NPO法人 日本ボランティアコーディネーター協会
事務局長

後藤 麻理子さん
ことろ まりこ

2005年4月から、日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)専従事務局として、市民社会を支えるボランティアコーディネーターのネットワークづくりをめざし、人材養成や調査研究、啓発活動を進めている。東京都社協東京ボランティアセンター(当時)勤務時には、市民からのボランティア相談や地区ボランティア活動・企業の社会貢献活動などを推進。東京都北区ボランティアセンター出向時には、地域福祉活動計画策定にも参加。

第2回

「社協ボラセン今昔物語」～こんな時なのでオトナシク振り返り

社会福祉協議会のボランティアセンター(以下、ボラセンという)が時代とともにどのように変化してきたのか。地域や人口規模などによる違いはあると思いますが、ざっくりと概観してみましょう。

①全国各地でボラセン設置が進む～制度の狭間と向き合う

市町村のボラセンが、ボランティア活動を推進するためのハードとソフトを備えた拠点として各地に登場しはじめたのは、1985(昭和60)年に始まった「ボラントピア事業」がきっかけとあってよいと思います。年600万円×2年間という補助金をもとに、センターの設置とスタッフの配置が進みました。

折しも福祉が施設から在宅へと舵を切り、地域における福祉サービスの充実が求められた時。高齢化が進むなか、支える制度も担い手も十分に整っていない時代です。既存の福祉制度・サービスでは対応できず、たらい回しにされた人々からの相談がボラセンに入りました。ある意味「最後の砦」と同時に、分類すれば「その他」に入るような相談から重要なニーズの芽を見つけることもあり、潜在する「ニーズキャッチの場」でもありました。

それらに対応するために、ボランティアによるシフトを組んだり、対応するグループを作ったりという動きも生まれます。ボランティアが制度やサービスの補完になっているという指摘もされましたが、時を経て新たな行政サービスや企業の商品開発につながったものも数多くありました。

②新たな層の活動者を開拓～活動のハードルを下げる

1993(平成5)年、国(厚生省)の告示を受けて、全社協は「ボランティア活動推進7か年プラン構想について」を策定。ここでは(1)誰でも、いつでも、どこでも、気軽に活動に参加できる環境・機会づくり、(2)ボランティア活動

への世論形成、活動を支援する体制づくり、(3)推進拠点としてのボランティアセンターづくりの3つを重点課題としました。新たな活動者開拓のために参加のハードルを下げた体験型プログラムや、シニア・勤労者・青少年など対象を絞っての入門講座の開催など、啓発や学習型のプログラムが定番に。

この頃からボラセンでは、活動(希望)者側の関心やニーズに軸足を置いた事業が多数展開されるようになった印象があります。ボラセンに登録するボランティア数も増加していきました。一方、「やりたいこと」と「やってほしいこと」が合致しない、そんな声がコーディネーターから聞かれるようになった時期でもあります。

その後、一時は3,000か所を超え順調に伸びてきたボラセンですが、平成の自治体大合併により半減します。1989(平成元)年から合併のピークあたりまでの、ボラセンの設置数と市町村数の推移を示したのがこのグラフです(設置数は全社協調べ)。カバーするエリアの拡大やスタッフの減少などもあり、役割や機能の見直しを余儀なくされたボラセンも少なくありません。

③頻発する大規模災害～災害ボラセン運営への期待が高まる

2004(平成16)年、豪雨、地震と大きな災害が相次ぎ、複数の市町村で社協に災害ボランティアセンターが設置

され、「協働型」で運営されました。これ以降も、東日本大震災をはじめ、毎年のように大きな災害が各地で発生する状況をふまえ、社協は「災害ボランティアセンター」の設置を想定しての準備をすることを求められます。発災時はもちろん、大きな災害に備えて平時から関係機関との調整やルールづくり、立ち上げ訓練などを行うことがボラセンの重要な役割(業務)として位置づいていきます。

④生活支援事業や専門相談窓口の充実～ボラセンはどこへ

この10年ほどの間に、地域のなかにはさまざまな専門相談の窓口ができました。多くの社協では生活支援に関わるいくつかの新規事業を受託。また小さく地域を分けて担当者を配置する動きも進みました。いずれもコーディネーターの機能を発揮することが期待される役割であり、「アウトリーチ」「市民参加」「協働」など、これまでボラセンが大切にしてきたアプローチと重なることも少なくありません。

このことは、あたらめてボラセンの役割が問われている背景でもあります。

時代とともに変遷してきたボラセンが、いま「何を求められ」「どのような役割を果たせるのか」。次号ではボラセンの独自性と可能性について考えてみたいと思います。

社協のボランティアセンター設置数 単位:カ所

